

各界権威の20大分析

1991年の20大

C.S.C.L.
SOMMET DE PARIS
-21 NOVEMBRE 1990



『各界権威の1991年の20大分析』 『週刊ダイヤモンド-1990.12.22』

91年の
20大潮流



国際情勢

「1989—90年革命」の 後始末をつける

東京外国語大学教授 中嶋 嶺雄



脱社会主義化と脱冷戦化

1989年から90年にかけて、世界は20世紀の歴史を根本的に覆すような動きを示してきた。20世紀は革命と戦争の世紀といわれる。革命ということでは、ロシア革命以来の社会主義が根本的に崩れる過程、すなわち脱社会主義化が進行し、それは今や後戻りできない潮

流となって動いている。一方、世界戦争の危機さえあるといわれていた米ソ関係は歴史的な和解を遂げ、脱冷戦化の時代が90年から始まったといっている。

私はこれを「1989—90年革命」と呼んでいる。脱社会主義、脱冷戦という2つの大きな歴史の流れを基軸にして、世界はまさに根本的に変わった。その最後の仕上げ

が東西ドイツの統一であったといっている。東西ドイツ統一は、社会主義の変化、東欧の変化、そしてそれらを是認せざるをえなくなった、ゴルバチョフ・ソ連の立場があったからこそ行われた。一方、そうした東欧の民主化、東西ドイツの統一から、最近のヨーロッパにおける全欧安全保障体制の確立による新しい不戦戦略は、米

警告 潮流

20世紀の世界が劇的な最終楽章を演じ始めた。主要なプロット（細部の展開）は1989年から90年にかけて打ち出された。特にユーラシア大陸とその周縁部での鳴動が高まっている。日本の出来事でこの地球規模変革の影響を受けないものはないだろう。すべての政治・経済・社会現象が世界との接点のなかにある。91年はその接点が拡大し、面へと広がっていくことを、今まで以上に感じさせる年になろう。外向きの潮流が内向きの潮流と激しくぶつかり合う年でもあろう。



人種的な新しい胎動が、ひょっとすると、従来の国家の枠組みを内部から大きく掘り崩していくことになるのかもしれない。

ソ連を従来のソ連邦でまとめていくことはもうできないだろう。ゴルバチョフ大統領も“主権共和国”と言っているように、独自に主権を持った共和国の連合体、すなわち将来は、英連邦のようなかたちになっていく過程がすでに始まっているのではない。

中国も、そして恐らく北朝鮮も今後数年間のうちには、脱社会主義化の圧力と、台湾、香港、韓国、シンガポールあるいはASEANの一部の国の活力ある経済によって、社会主義体制が侵食されていく可能性がある。それが世代交代、つまり革命第1世代の鄧小平、金日成の退場とも絡んで大きな変化をもたらすだろう。場合によると香港が返還される97年前に、中国の共産党政権のほうは崩壊するかもしれないとさえ思う。

アジアに“共通の家”はない

ヨーロッパには伝統的に独自の国際システムがあったし、社会主義がなくなれば、元の西欧近代国家体系に戻っていくことができる。だがアジアにはそうした国家体系はないし、“ヨーロッパ共通の家”のような共通基盤も全く欠如している。脱冷戦、脱社会主義という世界の潮流にそのまま移

ソの歴史的和解があったからこそ実現したとっていい。

90年代の世界は、このような天命を改めるという意味での、本来の“革命”が起こったともいえるような大変化の後始末をどうつけていくのか。その処理いかんが、これから残り少ない20世紀を規定していくのではなからうか。

イラクのクウェート侵攻も、米ソが冷戦体制のなかで対立競合していたなら、あのようなかたちでは起こらなかったろう。米ソのタガが緩んだ途端に、それぞれの地域の内発的な動き、あるいは地域的紛争が表出するというのが、今

日の世界の姿だといっている。

同じことは、ソ連のなかのバルト3国や、各連邦共和国のソ連邦からの離脱傾向、あるいは中国の民主化運動から始まった世界的な民主化、自由化への動きについてもいえる。89年4月以来の中国の民主化運動は、悲劇的な天安門事件という結果になったのだが、逆に考えると、中国のようにはなりたくないという合意がルーマニア以外の東欧諸国には存在したのであり、そのことが東欧諸国の脱社会主義化をもたらした。エスニステイという言葉が流行しているように、こうした民族、あるいは

行するわけにはいかないだろう。

特に最近の中国には保守勢力の台頭、最後のあがきのような抵抗が見られる。世界が市場経済を中心に、相互依存関係を深めようとしているのと全く反対の方向に行こうとしている。ポスト鄧小平までは、こうした世界の動きに逆行する体制を維持していくことになるだろう。

北朝鮮においては金日成、金正日の後継体制は、言ってみれば、権力継承システムにおける台湾化を図っていくのではないか。台湾も20~30年前までは完璧な独裁体制で、蒋介石独裁体制からその息子である蔣経国・権威主義体制へ移行し、そして今日の李登輝・民主体制まで発展してきた。北朝鮮は社会主義というより儒教的な権威主義体制といつてよいから、金日成が息子の金正日に儒教的な家父長体制のなかでの権力継承を行ない、次の段階として徐々に開国していく方向しか考えられない。さもなければ、北朝鮮のルーマニア化という深刻な事態になる。

しかも、南北朝鮮の分断という現実が依然としてある。南北朝鮮は朝鮮戦争で実際に血を流し合っ

た間柄であり、今日の南北朝鮮の違いはその社会的・国家的体質においても、東西ドイツの比ではない。アジアに見られる民族の分断はそれだけではない。1つの中国を競って、中華人民共和国と台湾が存在している。ソ連、ユーラシア大陸内部の新しい民族的な動きと絡んで、チベット問題や、分断されているモンゴル族、中国のトルコ系住民、ウイグル族などの動きも無視できない。

さらにアジアにはヨーロッパと違って、経済の極端な不均等発展がある。経済的な豊かさの指標として仮に1人当たりGNPをとってみると、日本が約3万^{ドル}。これに対して中国は300^{ドル}前後と、100対1の格差がある。中国と競い合っている台湾は8500^{ドル}、香港が1万2000^{ドル}、シンガポールが1万^{ドル}、韓国が4500^{ドル}。こうした格差は東西欧州の経済的格差をはるかに凌ぐものであって、それ自体がアジアの国際政治を摩擦の多いものにするだろう。

こうした状況のなかで、いかにアジアの共通の基盤をつくっていくかが、今後の大きな課題にならざるをえない。

自民党派閥外交の落日穴

91年4月には、このように不安定なアジアの政治経済環境のなかにある日本に、ゴルバチョフ大統領がやって来る。日本はもっぱら北方領土問題を懸案としているが、ゴルバチョフは日本を訪れる初めてのソ連最高指導者として、アジア・太平洋地域の軍縮や新しい安全保障システムの形成、シベリア開発への日本の協力、場合によれば信頼醸成措置を実現するために、シベリア抑留やかつての日ソ関係へのソ連側の自己批判などを伴う、非常に多角的な戦略を携えて来ると予想される。わが国は十分な対応をしておかなければならない。

こうした流動的な、新しい歴史が始まろうとしているなかで、日本がどのような国際的役割を担っていくのかということが、いよいよ本格的に問われることになる。国連平和協力法案をめぐる国内の議論は、十年一日のごとく憲法との距離感や自衛隊の海外派兵への賛否、軍国主義復活への懸念など、戦後的な価値観のなかだけで論じられた向きがある。この問題は、今日のアジアや世界の新しい歴史的発展のなかに位置づけられなければならない。

ところが実際には、最近の金丸訪朝、幻の安倍訪ソ、中曽根元首相のイラク人質外交などに見られるように、政府、外務省を飛び越して自民党の派閥外交が行なわれている。これは生臭い党内ポリテクスの反映としての外交であり、放置しておく日本の外交は、ますます方向を見失うことになるだろう。そういう意味でも、91年は日本外交にとって非常に大きな試練の年になろう。

「ゆとり」お贈りします。

あの人にいい時間 AGF ギフト

あの日「ゆとり」の香りを二人の間に置いて、あなたの静かな共鳴して、その後、思つた活躍のこと。あの時の「ゆとり」をお贈りします。

贈るのにふさわしいもの

- 家族ぐるみでつき合っている相手
- 気の合う遠慮のない相手

コーヒーギフト インスタント	40%
コーヒーギフト レギュラー	30%
日本茶	10%

贈る相手に評価されると思うポイント

- 相手の好みに合わせられるものである
- 相手の生活、家庭にあったものである

コーヒーギフト インスタント	40%
コーヒーギフト レギュラー	30%
日本茶	10%

(AGF調べ)